『語学教育研究論叢』第 35 号

『和漢三才図会』と『和名類聚抄』
―「未滑海藻」をめぐって―

楊　亜麗

A Study on *Wakansansaizue* and *Wamyoruijusho*
: Focusing on *Mikatsukaiso*

YANG Yali

摘要

《和汉三才图会》是编纂于日本江户时代的一部百科事典。作者寺岛良安效仿中国的《三才图会》，收录了中日两国的事物并以天地人的三大部类对宇宙万物进行分类，引用了诸多中日两国的古典文献进行说明并加以自己的考证。

本文聚焦于《和汉三才图会》的引用书目之一《和名类聚抄》，以《和汉三才图会》卷九十二至卷九十九的草类为考查范围，发现“未滑海藻”这一项目里作者虽然明确标注是对《和名类聚抄》的引用，但是《和名类聚抄》中却并不存在所引用的内容，本文通过对“未滑海藻”这一项目本文的考察，来分析寺岛良安在编纂《和汉三才图会》的引用手法与记述方式。

はじめに

正徳二年（一七一二）に刊行された寺島良安撰『和漢三才図会』一〇五巻

八一冊は江戸時代の絵入り百科事典である。明・王圻撰『三才図会』の天地人の分類にならい、全体を天人地の「三才」、すなわち天部（巻一～六）・人部（巻七～五十三）・地部（巻五十四～百五）に三分類し、和漢の事物を収載する。さらに「三才」の下位分類として、天文・人倫から禽獣・草木にいたる九十六の部類に分け、掲出項目は五一八一におよぶ。各項目には、和名・同義語・類義語等の解説と図、種類・製法・用途・薬効等を記して解説を施し、日本の地理・歴史・産物等を増補している。

こうした『和漢三才図会』の分類について、伊藤真実子氏は次のように述べられた。

> 寺島は、原著から新たに分類を立て直すのではなく、順序は少し異なるものの三才の分類の上にたち、さらに日本に関する項目を増やすことで日本版としたのである（1）。

『和漢三才図会』には多くの漢籍・和書が引用されるが、引用書目のなかには平安中期に成立した日本最古の分類体漢和辞書、源順撰『和名類聚抄』が一五二回引用されている。本稿は、『和漢三才図会』地部草類（巻九十二～九十九）における『和名類聚抄』引用例十六例のうち、『和名類聚抄』諸本の本文に確認されない唯一例「未滑海藻」について、『和漢三才図会』の出典を検討し、撰者寺島良安が『本朝食鑑』『大和本草』を引用していた可能性を論じる。

一、『和漢三才図会』における『和名類聚抄』の引用

『和名類聚抄』（以下、『和名抄』と略称）は現存する日本最古の分類体の漢和辞書であり、承平年間（九三一～九三八）に醍醐天皇皇女である勤子内親王の命によって源順が撰進したものである。漢語を部門別に類聚して掲出し、音義を漢文で注し、万葉仮名で和訓を付け、掲出語について漢籍・和書を博捜して考証と注釈を加えている。『和名抄』には十巻本系と廿巻本系の二系統の伝本が存在し、十巻本系は掲出語を二四部一二八部門に、廿巻本は三二部二四九門に分類する。江戸時代には、那波道圓による元和古活字版が

刊行され、狩谷棭斎によって『箋注倭名類聚抄』（以下、箋注と略称）が撰述された。

『和漢三才図会』における『和名抄』の引用回数は、一五四例である。表 1 は、『和漢三才図会』における『和名抄』の引用回数を巻ごとに示したものである。

表 1　『和漢三才図会』各巻の『和名類聚抄』引用回数

部	天	人																			
巻	1 ～ 6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
頻度	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	2	6	1	1	4	0	0	4	4	0

部	人																				
巻	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47
頻度	2	2	2	3	11	4	5	1	0	1	0	1	0	1	3	3	6	2	0	0	7

部	人						地														
巻	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68
頻度	3	2	3	6	3	5	0	1	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

部	地																				
巻	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89
頻度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	2	2	3	1	0	5	2	1

部	地															
巻	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105
頻度	0	0	2	1	5	0	0	8	0	1	0	0	1	3	1	1

表 1 から、天部（巻一～巻六）および日中の地理に関する地部（巻六十二～巻八十）には、『和名類聚抄』の引用が全く存在しないことが確認される。本稿では、『和漢三才図会』地部草類（巻九十二～九十九）の八巻について検討を加えてゆくこととする。

二、『和漢三才図会』地部草類における『和名類聚抄』の引用

表 2 は、『和漢三才図会』地部草類に引用された『和名類聚抄』十六例の本文を掲出したものである。

表 2　『和漢三才図会』地部草類所引『和名類聚抄』本文

No	掲出語	和漢三才図会
①	紫陽花	△按、『倭名抄』云、紫陽花出於『白氏文集』、叢生、莖葉似綉毬葉、而五月開花、其形異、莖頭出四五朶朶、端有未開小花数百顆、黄赤色、既開則紫色、其周匝有大白花十許、形似桜花、而総体作方宛似署扁板、俗呼名署扁花。

②	芒	順『和名抄』引『爾雅』云、草聚生曰薄、<『新撰万葉集』和歌云、花薄波奈須々木 >
③	朔藿	『和名抄』云、朔藿二音、此間音曾久止久
④	蘆草	△按『倭名抄』蘆草、< 和名加木奈、一云阿之井 >、黄草、< 加伊奈、『本朝式』云、刈安草 >、出二處、以為二物者、非也。多出於越前、以為染家必用之物、< 蘆汁加明礬染黄則令色不脱也、或下染藍、上用蘆汁、再染則成萌葱色 >
⑤	石龍蒭	△按『和名抄』云、石龍蒭、< 和名宇之乃比太非 >、江浦草、< 和名豆久毛、一云太久萬毛 >、以為二物。今謂豆久毛者即『本草』所謂石龍蒭、形状能似也。
⑥	紫菜	『倭名抄』載『食経』云、紫菜、状如紫帛、凝生石上、是物有三四種、以紫色為勝、俗曰神仙菜。
⑦	莫鳴菜	『倭名抄』云、文未詳、但神馬莫騎之義也。
⑧	海髪	『倭名抄』引『食経』云、海髪、< 醎、小冷 >、其色黒、状如乱髪。
⑨	海蘊	水雲、<『倭名抄』和名毛豆久 >
⑩	鹿角菜	△按『倭名抄』載『食経』云、海蘿、< 澁醎大冷 >、其性滑滑然、主九竅、則海蘿與鹿角菜一物也。『倭名抄』以為二物者非也。
⑪	萍蓬草	骨蓬 <『倭名抄』> △按萍蓬草乃源順載崔禹錫『食経』曰、骨蓬、根如腐骨、< 味醎大冷 >、花黄色、莖頭著葉者也。
⑫	金錢花	『和名抄』俗云、古無軟。 『倭名抄』云、梁簡文帝有金錢花賦。
⑬	未滑海藻	『倭名抄』載「本朝令」云、似海帯而細狭、有皺文。粗硬味劣、故食之者希矣。
⑭	磚子草	△按水莎草 <『和名抄』、莎草名具具香、附苗同名故加水 > 似續根草而長二三尺、又似絲苾而不垂、苅為雨衣、繦甚強、芒秋出小穂。
⑮	燕子花	『倭名抄』用劇草或杜若訓加歧豆波太、並訛也。劇草馬藺也、< 湿草 >。杜若藪、生薑也、< 芳草 >。
⑯	乾薑	『倭名抄』云、生薑、< 久禮乃波之加美 >、蜀椒、< 奈留波之加美 >、蔓椒、< 以多知波之加美 >、以此等考之性、昔謂波之加美者辛果之、総名也。

表 2 に示した『和漢三才図会』地部草類の『和名抄』引用十六例は、その内容によって、次のように二分類される。

（1）和名の引用のみ：七例。

③朔藿・④蘞草・⑤石龍芻・⑨海蘊・⑭磚子草・⑮燕子花・⑯乾薑

（2）『和名抄』本文の引用がある：九例。

①紫陽花・②芒・⑥紫菜・⑦莫鳴菜・⑧海髪・⑩鹿角菜・⑪萍蓬草・⑫金錢花・⑬未滑海藻

このうち、（2）『和名抄』本文を引用する九例のうち、唯一、「未滑海藻」のみは、引用文が出典『和名抄』諸本の本文に確認されない。そこで、「未滑海藻」に着目し、『和漢三才図会』における寺島良安の引用と記述について検討を加えてゆく。

三、海藻・滑海藻・未滑海藻

『和漢三才図会』地部草類が『和（倭）名抄』として引用する本文のうち、現存する『和名抄』諸本に当該本文が確認されないのは、⑬滑海藻＜未附＞一例のみである。

かちめ　和名加知女

未滑海藻

さがらめ 俗云相良布

『倭名抄』ニ載ニ「本朝令」一ヲ云、似ニテ海帯（アラメ）一ニ而細狭ク有ニリ皺文一粗硬ク味劣レリ、故食レフ之者ノ希ナリ矣。

按遠州相良浦ヨリ多出ル、故称ス相良布ト、可シ炙リ食。

表 3 は、『和漢三才図会』「未滑海藻」に対応する『和名抄』諸本の本文を対照したものである（2）。

表 3 『和名類聚抄』「海藻」「滑海藻＜未附＞」

掲出語			本文
十巻本	天文	海藻	本草云、海藻、＜和名尓歧女、俗用和布＞。味苦鹹寒、無毒者也。 本朝令云、滑海藻、＜阿良女、俗用荒布＞。味滑海藻、＜加知女、俗用押布、搗布末之義＞。
	松井	海藻	本草云、海藻、＜迩歧米、俗用和布字＞。味苦鹹寒、無毒者也。　本朝令云、滑海藻、＜阿良米、俗用荒布＞。未滑海藻、＜加知女、俗用搗布、搗者、楊末之義也＞。
	前田	海藻	本草云、海藻、＜迩歧米、俗用和布字＞。味苦鹹寒、無毒者也。 本朝令云、滑海藻、＜阿良米、俗用荒布＞。未滑海藻、＜加知女、俗用搗布、搗者、楊末之義也＞。
梜齋	箋注	海藻	本草云、海藻、＜邇歧米、俗用和布字＞。味苦鹹寒、無毒者也。 本朝令云、滑海藻、＜阿良米、俗用荒布＞。未滑海藻、＜加知女、俗用搗布、搗者、搗末之義也＞。
廿巻本	元和	海藻	本草云、海藻、味苦鹹寒無毒、＜和名迩木米、俗用和布＞。
		滑海藻＜未附＞	本朝令云、滑海藻、＜阿良女、俗用荒布＞。未滑海藻、＜加知女、俗用搗布、搗者搗末之義也＞。
	伊勢	海藻	本草云、海藻、味苦鹹寒無毒、＜和名迩木米、俗用和布＞。
		滑海藻＜未附＞	本朝令云、滑海藻、＜阿良女、俗用荒布＞。未滑海藻、＜加知女、俗用搗布、搗者末之義＞。
	天正	海藻	本草云、海藻、味苦鹹寒無毒、＜和名迩木米、俗用和布＞。
		滑海藻＜未附＞	本朝令云、滑海藻、＜阿良女、俗用荒布＞。未滑海藻、＜加知女、俗用搗布、搗者末之義＞。

表 3 から、次のことが確認される。

第一に、『和漢三才図会』の掲出語は「未滑海藻」である。これに対して、『和名抄』十巻本系と箋注は、「海藻」という一項目で「海藻」「滑海藻」「未滑海藻」について述べる。廿巻本系は「海藻」と「滑海藻＜未附＞」をそれぞれ別の項目として立てて、両者を区別して、「滑海藻＜未附＞」と

いう一項目で「滑海藻」「未滑海藻」について述べる。そして、和名から分かるように、「滑海藻＜阿良女、俗用荒布＞」と「未滑海藻＜加知女、俗用搗布、搗者末之義＞」は同じものではない。

「未滑海藻」は、『和名抄』十巻本系でも廿巻本系でも掲出語ではなく、ただ本文の一部として存在する。したがって、『和漢三才図会』は、『和名抄』の掲出語を採用したのではなく、本文の「未滑海藻」をとって、新しく掲出語として立てたのである。

第二に、『和漢三才図会』「未滑海藻」の和名「加知女」は、『和名抄』諸本の「未滑海藻」の和名カチメ「＜加知女＞」と一致する。しかし、『和名抄』諸本が「未滑海藻」と対照するアラメ「滑海藻＜阿良米、俗用荒布＞」には、「似二テ海帯（アラメ）一」として参考程度に触れるにすぎない。「滑海藻＜阿良米、俗用荒布＞」と「海帯（アラメ）」は同じものであるが、『和漢三才図会』では、漢字の表記は「荒布」を「海帯」に改めている。『和漢三才図会』は、あくまでも「未滑海藻」に関心を寄せている。

『和漢三才図会』が『和（倭）名抄』として引く本文は、『和名抄』には確認されない。寺島良安は、この出典不明の本文を何から引用したのであろうか。

四、『和名抄』にない「未滑海藻」の引用文

『和漢三才図会』と『和名抄』諸本が等しく引用する「本朝令」は、賦役令第一条（3）に、

> 滑海藻二百六十斤、海松一百卅斤。凝海菜一百廿斤。雑腊六斗。海藻根八斗。未滑海藻一石。

とあるのみで、出典不明の本文は「本朝令」には確認されない。

狩谷棭斎の『和名抄』自筆書入本（4）は元和古活字版に書き入れを付したものであるが、「滑海藻＜未附＞」の頭注として次の書き入れがあり、棭斎も賦役令を引用している。

> 賦役令　滑海藻二百六十斤、未滑海藻一石。

（「賦役令」に、「滑海藻二百六十斤」、「未滑海藻一石」。）

椛斎の自筆書入本には、「滑海藻＜未附＞」の左側に、次の書き入れがあることに注目したい（5）。

貝原云海帯

又云カチメ、又サカラメト云　海帯ニ似テ細ク狭シ皺アリ干タルヲキサミテ羹ニ加レハ子ハルナリ

（貝原云はく、「海帯」。

又カチメと云ふ。又サガラメと云ふ。海帯に似て細く狭し。皺あり。干したるをきざ（刻）みて羹に加ふれば、ねばるなり。）

椛斎が「貝原云」として引くこの本文は、正徳二年（一七一二）刊『和漢三才図会』の出典不明の『倭名抄』引用文に類似している。両者を訓読して対照すると、次のように傍線部はほぼ一致する。ただ、椛斎自筆書入では「皺アリ」にしているが、『和漢三才図会』では「皺文有リ」、「文」の字は増加され、「アリ」は片仮名から漢字仮名交じり文にしている。

和漢三才図会：<u>海帯（アラメ）ニ似テ細ク狭ク、皺文有リ</u>。粗硬ク味劣レリ、故、之ヲ食フ者ノ希ナリ。

椛斎自筆書入：<u>海帯ニ似テ細ク狭シ。皺　アリ</u>。干タルヲキサミテ羹ニ加レハ子ハルナリ。

椛斎のもう一つの著作である『箋注和名類聚抄』は、椛斎の校訂本文であり、文政十年（一八二七）に成立し、明治十六年（一八八三）刊行された。自筆書入本との相互関係はまだ不明であるが、箋注も、自筆書入本同様、やはり「貝原氏云」として、「海藻」の項の「未滑海藻」に次のように注する（6）。

貝原氏曰、加知米、或云相良米、相良遠江地名、<u>似海帯細狭、多皺文</u>、乾之為末、加之羹、最粘滑。

（貝原氏曰く、「加知米、或いは相良米と云ふ。相良・遠江の地名。海帯に似て細く狭く、皺文多し。之を乾し末と為し、羹に之を加ふれば、最も粘滑なり。）

この注文の「似海帯細狹、多皺文」は、『和漢三才図会』の出典不明の引用文の「海帯（アラメ）ニ似テ細ク狹ク、皺文有リ」と類似する。ただ、箋注では、「多皺文」にしているが、『和漢三才図会』では「皺文有リ」にしている。

以上のことから、椄斎自筆書入「貝原云」および椄斎箋注「貝原氏云」は、『和漢三才図会』の出典不明の引用文の「海帯（アラメ）ニ似テ細ク狹ク、皺文有り」にほぼ一致することが確認される。このことから、『和漢三才図会』と椄斎が「貝原」「貝原氏」の記した本文を参看していた可能性が想定される。

この「貝原」「貝原氏」とは、どのような人物であったのか。

五、貝原益軒撰『大和本草』と『和漢三才図会』

「貝原」「貝原氏」は、本草学者の貝原益軒のことではないか。

貝原益軒（寛永七〈一六三〇〉～正徳四〈一七一四〉）は、福岡藩の本草学者であり、宝永五年（一七〇八）七九歳のときに『大和本草』を撰述し、翌年、版行された。

『大和本草』には、椄斎の「貝原云」「貝原氏」という書き入れのとおり、「海帯」と「カチメ」という二つの項目が存在する。

まず、「海帯」の本文は次のとおりである（7）。

> 本草載之、出登州、圖経云、「似海藻而粗且長、登人取乾之、柔韌可以繫束物」。醫家用之下水、速於海藻、昆布之類。〇今按海帯ハ海中ノ石ニ附テ生ス、黒クメタテ皺アリ、性冷利ナリ、虚人食スレハ泄利ス、祛瘀血、消腫毒、治痔疾。壮實人食之無害、虚冷人勿食、煮ルニ醋ヲ加フレハヨクニユル。〇アラメヲ煮テ、雨水ヲソヽケハ、大蛭トナル。順和名抄曰、滑海藻。和名阿良女。〇俗ニ是ヲ竿頭ニ多ツケテ火ヲケス帚トス。
>
> （『本草』之を載す。登州に出づ。『圖経』に云はく、「藻に似て粗く長し。登人取て之を乾し、柔韌にして以て物を繫束す」と。醫家之を用ゐて下水すること、海藻・昆布の類より速し。〇今按ずるに、海帯は海中の石に附きて生ず。黒くしてたて皺あり、性、冷利なり、虚人食すれば

泄利す。瘀血を祛(はら)ひ、腫毒を消し、痔疾を治す。壮實人、之を食すれど害無し。虚冷人、食すること勿かれ。煮るに醋を加ふれば、よくにゆる。〇アラメを煮て、雨水をそそげば、大蛭となる。順『和名抄』曰く、「滑海藻。和名阿良女」。〇俗に、是を竿頭に多くつけて、火を消す帚とす。

ここには『和漢三才図会』の引用文に類する内容は見られないが、「順和名抄曰、滑海藻。和名阿良女」と、『和名抄』が引かれていることに注目したい（8）。『大和本草』では項目名として「海帯」を立てたが、この「海帯」は『和名抄』「滑海藻」とは同じものである。

次に、『大和本草』「カチメ」の本文は、次のとおりである。

和品　カチメ　又サガラメト云、海蔕(アラメ)ニ似テ、細ク狹シ皺(シハ)アリ、ホシタルヲキサミテ、羹ニ加レハ子ハル、賤民ノ食也。又、此物竿頭ニ多ツケテ火災ヲケスニ用ユ、火ニモエズシテヨシ。アラメニ同シ。

（和品カチメ、又、サガラメと言ふ。海帯に似て、細く狹し、皺あり。ほしたるを刻みて、羹に加ふればねばる。賤民の食なり。又、此の物、竿頭に多くつけて、火災を消すに用ゆ。火に燃ゑずしてよし。アラメに同じ。）

ここで、「カチメ」はまた「サガラメ」という、これは『和漢三才図会』「未滑海藻」の「かちめ　和名加知女」「さがらめ　俗云相良布」と一致している。

また、この宝永六年（一七〇九）刊『大和本草』「カチメ」の本文は、正徳二年（一七一二）刊『和漢三才図会』の出典不明の引用文の「海帯(アラメ)ニ似テ細ク狹ク、皺文有リ」に近い。椄斎の箋注の成立は、文政十年（一八二七）とされ、椄斎が安永四年（一七七五）から天保六年（一八三五）まで生きたことから、自筆書入の成立年次は『和漢三才図会』の後だとはいえよう。

大和本草　：[一]海蔕(アラメ)ニ似テ、細ク狹シ。皺(シハ)　アリ。[二]ホシタルヲキサミテ、[三]羹ニ加レハ子ハル、賤民ノ食也。

和漢三才図会：[四]海帯(アラメ)ニ似テ　細ク狹ク、皺文有リ。

粗硬ク味劣レリ、故、之ヲ食フ者ノ希ナリ。

椛斎自筆書入：[五]海帯ニ似テ　細ク狭シ。皺　アリ。[六]干　タルヲキサミテ、[七]羹ニ加レハ子ハルナリ。

三者を比較すると、『大和本草』（傍線［一］［二］［三］）と椛斎自筆書入（傍線［五］［六］［七］の内容はほぼ一致している。ただ、『大和本草』は「ホシ」（傍線［二］）にしているに対して、椛斎自筆書入は「干」（傍線［六］）にしている。椛斎自筆書入では『大和本草』（傍線［三］）の上に「ナリ」を書き加えて文章を終わったが（傍線［七］）、「賤民ノ食也」という内容は存在しない。また、『和漢三才図会』と『大和本草』は部分的に似ているが（傍線［一］と傍線［四］）、ただ、「皺文有リ」と「皺（シハ）アリ」の違いがある。

以上から分かるように、『和漢三才図会』の「未滑海藻」の和名、俗名は『大和本草』の「カチメ」（サガラメ）と一致すること、及び「海帯（アラメ）ニ似テ細ク狭ク、皺文有リ」は貝原益軒撰『大和本草』「カチメ」の「海帯（アラメ）ニ似テ、細ク狭シ皺（シハ）アリ」と似ていること、狩谷椛斎自筆書入「貝原云」と椛斎箋注「貝原氏云」は『大和本草』をさし、椛斎は『大和本草』「カチメ」を参看し、「ホシタルヲキサミテ、羹ニ加レハ子ハル」まで引用していることが確認される。椛斎が『大和本草』を重視していたことは注目されてよいであろう。しかし、『和漢三才図会』の引用文の「粗硬ク味劣レリ、故、之ヲ食フ者ノ希ナリ」は『大和本草』に確認できない。

六、『本朝食鑑』と『和漢三才図会』

「未滑海藻」引用文の「粗硬ク味劣レリ、故、之ヲ食フ者ノ希ナリ」は、何にもとづくのであろうか。

『和漢三才図会』成立以前の『本草綱目』『訓蒙図彙』『庖厨備用和名本草』『本朝食鑑』を調査したところ、『本朝食鑑』にこれに類する文章が見いだされた。

元禄十年（一六九七年）に刊行された人見必大によって著された『本朝食

鑑』十二巻十冊は江戸時代の食物本草書である。『本草綱目』に依拠しつつ人見必大の解釈を加えたものである。食用・医用の本草を四一八種に分類されていて、項目ごとに、その産地・性質・功能・滋味等を詳しく述べて、当時の食生活も記述されたものである。

『本朝食鑑』巻三「菜部」には、「荒布」という項目を立て、次のような記述がみえる（9）。

搗布（カヂメ）、似荒布而細狭、有細皺文。粗硬味不佳、不足為上饌耳（ノミ）。

（搗布（カヂメ）、荒布に似て細く狭く、細き皺文有り。粗硬にして味佳ならず、上饌為るに足らざるのみ。）

『本朝食鑑』のこの文は、『大和本草』よりも『和漢三才図会』の引用文にさらに近い。三書を訓読し対照して示すと、次のようになる。

本朝食鑑　：荒布ニ似テ細ク狭ク、細き皺文有リ。粗硬ク味佳ナラズ、上饌為ルニ足ラザルノミ。

大和本草　：海蒂（アラメ）ニ似テ細ク狭シ　皺（シハ）　アリ、ホシタルヲキサミテ、羹ニ加レハ子ハル、賤民ノ食也。

和漢三才図会：海帯（アラメ）ニ似テ細ク狭ク、　皺文有リ。　粗硬ク味劣レリ、故、之ヲ食フ者ノ希ナリ。

ここで、「搗布（カヂメ）」は『和名抄』の「未滑海藻＜加知女、俗用搗布、搗者末之義」とは同じものである。「荒布」は「滑海藻＜阿良女、俗用荒布＞」とは同一物である。前述したように、『大和本草』における「海帯」は『和名抄』「滑海藻」とは同じものである。換言すれば、「滑海藻」「荒布」「海帯」は同一物である。

このことから、次の点が確認されよう。

第一に、元禄十年（一六九七）に刊行された『本朝食鑑』の「荒布ニ似テ細ク狭ク、細ク皺文有リ」は、宝永六年（一七〇九）に刊行された『大和本草』と正徳二年（一七一二）に刊行された『和漢三才図会』に引用された可能性が高い。ただし、『大和本草』『和漢三才図会』は「荒布」を「海帯」に改めている。

第二に、『本朝食鑑』「粗硬ク味佳ナラズ」は、『和漢三才図会』「粗硬ク味劣レリ」とほぼ同じ意味である。ただ、「味佳ナラズ」と「味劣レリ」の違いがある。『和漢三才図会』は「粗硬ク味佳ナラズ」も引用したと考えられる。しかし、『大和本草』にはこれに相当する本文は存在しない。

第三に、『大和本草』「ホシタルヲキサミテ、羹ニ加レハ子ハル」は、『本朝食鑑』『和漢三才図会』には存在しない。『大和本草』独自の本文である。

第四に、評価にかかわる部分はかなり異なる。

『本朝食鑑』：上饌ト為ルニ足ラザルノミ

『大和本草』：賤民ノ食也

『和漢三才図会』：故、之ヲ食フ者ノ希ナリ

むすび

『和漢三才図会』地部草類が『和名抄』を引用する十六例のうち、出典『和名抄』本文に確認されない「未滑海藻」一例について検討した結果、『和名抄』諸本の本文に確認されない引用文は、『本朝食鑑』にほぼ一致することが確認された。

『和漢三才図会』「未滑海藻」の引用文の「海帯（アラメ）ニ似テ細ク狭ク、皺文有リ」は、『大和本草』「カチメ」の本文「海蔕（アラメ）ニ似テ、細ク狭シ皺（シハ）アリ」にも類似する。したがって、『大和本草』「カチメ」の本文は『本朝食鑑』を引用したと考えられる。

『和漢三才図会』の「未滑海藻」の和名、俗名は『大和本草』の「カチメ」（「サガラメ」）と一致することも確認された。

『和漢三才図会』に遅れる椄斎自筆書入と箋注は『大和本草』「カチメ」を参看していたことが考えられる。

なぜ、寺島良安は「未滑海藻」において、『本朝食鑑』と一致する本文及び『大和本草』と一致する和名、俗名を引用しながら、『本朝食鑑』『大和本草』の書名を掲出しなかったのか。この点について、『和漢三才図会』所引『本朝食鑑』『大和本草』を中心に、引き続き調査を進め、寺島良安の『本朝

食鑑』『大和本草』に対する引用の態度を究明してゆきたい。

注

(1) 伊藤真実子「19 世紀日本の知の潮流 - 江戸後期～明治初期の百科事典、博物学、博覧会 -」（『19 世紀学研究』一九世紀学学会、二〇一二年三月）。

(2) 天文本：東京大学国語研究室編『倭名類聚抄天文本』（汲古書院、一九八 七年一月）。
松井本、前田本：馬渕和夫編『十巻本系古写本の影印対照』（勉誠出版、二〇〇八年八月）。
箋注本、元和本：京都大学文学部国語学国文学研究室『諸本集成倭名類聚抄本文篇』（臨川書店、一九六八年七月）。
伊勢本、天正本：馬渕和夫編『二十巻本系諸本の影印対照』（勉誠出版、二〇〇八年八月）。

(3)『新訂増補国史大系　令義解』（吉川弘文館、一九七七年六月）。

(4) 狩谷棭斎『倭名類聚鈔：棭斎書入』（早稲田大学出版部、一九八七年十二月）。

(5) 同上。

(6) 注（2）の前掲書

(7) 貝原益軒撰『大和本草』の引用は全部国立国会図書館蔵『大和本草』（白井氏蔵書　特 1-2464）による。以下、『大和本草』の引用は本書による。

(8)『大和本草』の引用書目のなかに『和名抄』が含まれていることは、郭崇氏が指摘されている。郭崇「貝原益軒撰『大和本草』の引用書目」（『外国語学会誌』第四十七号、二〇一八年三月 刊行予定）。

(9) 人見必大撰『本朝食鑑』の引用は全部国立国会図書館蔵『本朝食鑑』（140-162）による。